

「皇帝への税金についての問答」

2022年04月22日

彼等は来て、イエスに言った。「先生、私たちは、あなたが真実な方で、誰をもはばからない方だと知っています。人に分け隔てをせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか。納めるべきでしょうか。納めてはならないでしょうか。」(マルコ福音書 12 章 14 節)

彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、誰の肖像と銘か」と言われた。彼らが「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚嘆した。(マルコ福音書 12 章 16 節～17 節)

エルサレム神殿当局は、自分たちが築き上げてきた宗教管理体制を揺るがす主イエスの振舞い、また、神殿の権威を蔑ろにした暴力事件に怒り、殺害を決定的なこととした。しかし民衆は、権威を恐れず、自分たちの思いを代弁する主イエスの言動に感激し、篤い支持を寄せていた。当局は、手出しできないジレンマに苦しんでいた。そこで、論争を仕掛けて、無残な敗北を民衆の前に晒し、主イエスへの敬意と人気を奪い取ろうとした。

彼らは、ファリサイ派とヘロデ党の人を数人、主イエスのところに遣わした。彼らは来て、主イエスに、「先生、私たちは、あなたが真実な方で、誰をもはばからない方だと知っています。人に分け隔てをせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです」と挨拶した。この挨拶は、極めて丁寧で、敬意に溢れている。しかしもちろん、尊敬を込めた挨拶ではなく、これからの問う質問で、主イエスを陥れることができるという自信が、このような慇懃な挨拶になったのである。その質問は、「ところで、皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか。納めるべきでしょうか。納めてはならないでしょうか」であった。ローマの支配下にあったので、ローマへの税金が課せられていた。その税金は納めるべきか、納めてはならないかという問いである。

この時、ファリサイ派とヘロデ党の者たちを遣わしていた。ファリサイ派は、イスラエルの伝統を重んじる愛国主義者であるから、ローマへの税金を納めたくない。一方のヘロデ党は、親ローマ主義で、ローマの支配を容認し、納税を当然としていた。もし、主イエスが納めよと答えれば、ローマを恐れる気骨のない者として、ファリサイ派があげつらうことができる。納めなくてもよいと答えれば、ローマに反逆する者として、ヘロデ党が訴えることができる。両派は、犬猿の中であったが、主イエスを陥れるために共同作戦を取って、「Yes」とも「No」とも答えられない窮地に追い込む質問を持ち出したのである。

主イエスは、デナリオン銀貨を持って来させ、「これは、誰の肖像と銘か」と問うと、彼らは「皇帝のものです」と答えた。すると主イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われた。この世の秩序には従い、皇帝への税金は納めなさい。しかし、神のもの、即ち、神への信仰は神にのみ献げよと理解し、政治と宗教の分離を教えられたという理解も成り立つであろうが、主イエスは、そのような近代法を語られたのではない。「神のもの」とは、ファリサイ派が強要した神殿税のことである。「皇帝のもの」とはヘロデ党が強要したローマへの税金である。主イエスは、あなたがたは自分たちに都合よく、それぞれの納税を強いているではないか。そのようなあなたがたが、ローマへの納税の可否を問う資格があるのかと、一蹴されたのである。主イエスに自分たちの卑劣さを見透かされ、彼らは驚愕し、言葉を失い、退散せざるを得なかった。